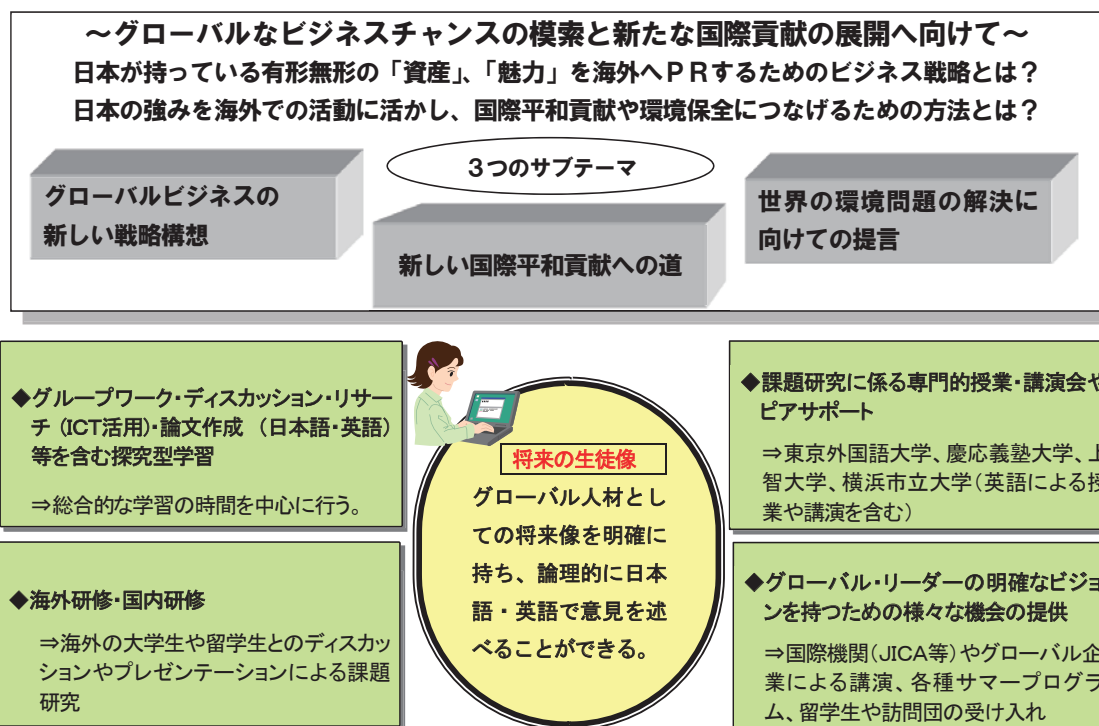


神奈川県立横浜国際高等学校

気づき、考え、行動する グローバル・リーダー育成の戦略的プログラム

【構想の概要】

課題研究テーマ	「日本の強みを海外へ売り込む方法の研究」
目的	日本人としてのアイデンティティを持ち、グローバル社会の課題を認識し、問題解決能力を発揮して、解決策を論理的に発信し、成果を上げることができる人間的魅力に満ちたグローバル・リーダーを育成すること
対象生徒	平成 26 年度入学生 240 名（国際情報科）から年次進行で実施 現在国際情報科（3 年次）、国際科（1・2 年次生徒）595 名全員が S G H 対象



3年間の主な取組（単位制の専門高校・必修教科科目を中心に活動）

	4 月～7 月	8 月～12 月	1 月～3 月
1 年次	◇総合的な学習の時間（〈Subject Research〉テーマ選定のための学習）、◎総合英語、□現代社会 ◇SGH 講演会 ◎英語ディベート基礎 □社会問題グループワーク	◇SGH 講演会、ブックレポート、ピアサポート ◎英語ディスカッション	◇課題研究テーマレポート □社会問題討論会 ◎英語ディベート
2 年次	◇総合的な学習の時間（Project Research〈PR〉・日本語論文の作成）、◎英語理解 ◇調査分析と中間発表 ◎英語ディベート活動	◇調査・論文執筆、ピアサポート ◎英語ディベート実践	◇PR 発表会、活動報告会 ◎英語ディベート実践
3 年次	◇総合的な学習の時間（Discussion&Research〈DR〉・英語論文の作成）、◎I C ◇DR テーマグループ内発表 ◎英語ライティング活動	◇英語論文作成・グループ内発表 ◎英語ディベート実践	◇報告書の作成 ◎英語ディベートまとめ

横浜国際高等学校 SGH の特徴

本校は平成 20 年度に単位制の国際情報科の専門高校として開校し、平成 29 年度より国際科と改編し、平成 31 年度には国際バカロレアコース（仮称）を開設する予定である。

本校の当初の教育目標である「社会のグローバル化に対応し、国際化・ICT化の進む日本社会、国際社会でリーダーとして活躍する人材を育成する。」という視点からSGH事業の取組を行っており、研究開発事業として科目開発を旨とした取組を全校生徒対象に行っている。

このSGH事業を円滑に実施するために、様々な教科の職員が集まる「SGH推進チーム」を編成し、毎週定例の会議を開催して、本校の取組の方向性を協議して進めている。

単位制の高等学校のため、全員が共通して履修する科目として「総合的な学習の時間」、「外国語（英語）」及び「現代社会」の科目を中心に3年間の系統的な指導を行うことにより、SGHの研究開発構想に沿った課題研究を生徒一人ひとりが行っている。卒業後はその研究活動を通して得た学習への取組を生かし、キャリア選択に結びつけている生徒が多く出ている。

教科指導を踏まえた中で、教科外の活動として海外スタディツアーの実施による課題研究の深化、生徒の自主的な委員会活動や個人的な活動のサポートをすることにより生徒が国内外に視野を広げているとSGH推進チームは分析している。

このような活動の実施に向けて、東京外国語大学や近隣の大学との連携を深め、運営指導委員や大学関係者などの外部有識者及び神奈川県教育委員会の指導・助言を受けながら生徒の探究力を伸ばす有意義な活動になるように方向性を確認しながら4年間の活動を終え、最終年度の取組を進めている。以上の内容について本校の取組について記述する。

「総合的な学習の時間」について

「総合的な学習の時間」を本校では、SR（Subject Research）、PR（Project Research）、DR（Discussion and Research）として3年間の系統的な指導を行っている。まず、2年次からの個人課題研究活動を進めるに当たり、テーマの設定が

非常に重要であると考えている。SGH講演会やワークショップ、ブックレポートなど一方的なアプローチではなく、振り返りの時間をきちんと確保して、理解を深め、生徒同士が意見交換をし、大学生からの助言により自分自身のテーマに対する考えを深めることができている。

2年次では、各自のテーマに沿った研究を進め、生徒は日本語による論文（A4版20枚）を完成させ、さらに3年次では、研究を深化させ英語による論文（1200語以上）を完成させる。当初は、A4版5枚という指定で行っていたが、目標語数を設定することにより、より内容の深い論文を完成させることができています。

「総合的な学習の時間」の指導は、職員1名につき生徒10名から15名を担当する。全教科の職員が指導に当たっている。統一した指導ができるように毎月担当者会議を開催して、指導内容や指導方針について確認した上で行っている。評価の観点も生徒に提示して進めている。今年度は、ルーブリック評価表を完成させ、取組状況をより明確に客観的な評価を実施してその取組状況を年度末にまとめる。

外国語（英語）、現代社会の取組

生徒全員が共通で履修する科目である「総合英語」（1年次）「英語理解」（2年次）「インターナショナル コミュニケーション」（3年次）及び「現代社会」（1年次）で、年間を通した探究型学習、コミュニケーション活動を取り入れた授業を行っている。

特に外国語（英語）の授業では3年間を通した継続的な活動を実践としてディベート活動を行っている。ディベートを通して、社会の課題に対する関心を持ち、課題を分析し、論理的思考力・問題解決力を高めることができています。

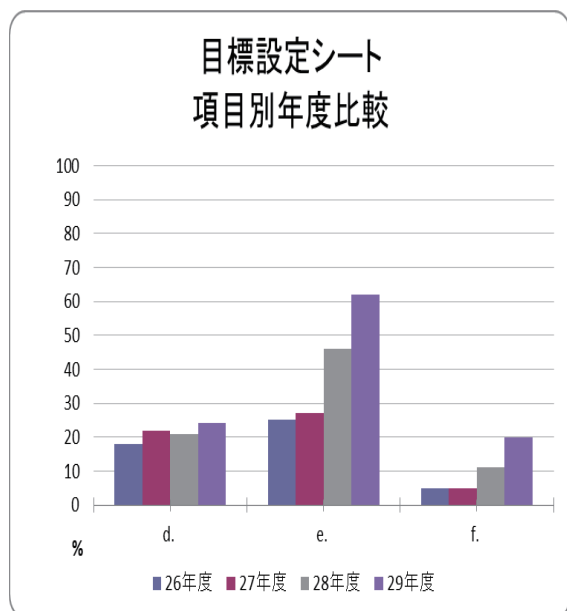
1年次は、教科書に関連したトピックを設定し、ディベートとはどのような活動かという基本的な内容を学びながら、学習内容の理解を深め、自分の意見を持ち、その意見を理解してもらえるようにグラフを用いるなど様々な工夫を自然とするようになる。また相手の意見を聞く姿勢も身に付いてくる。

2年次では、より論理的で説得力のある表現ができるように「ライティングスキルズ」という英文の表現力を高める授業と連携をとりながら、テーマ設

定もより一般的な論題にして議論を深めるようにしている。2 年次は特に英語の伸びがめざましく本校卒業時の目標として掲げている「C E F R の B 1 ～ B 2 レベルの生徒の割合」は 2 年次でほぼ達成している。

3 年次の授業では国内外の社会問題を取り上げて行う。生徒は、国内外の諸問題に対して知識と理解を深め、英語の表現力を高め、自分の意見を述べるコミュニケーション能力を伸ばす。さらに 3 年間のまとめとして、自分の考えを序論・本論・結論の形に英文で記述する力をつけることも目標としている。

評価については、定期テストでエッセイを記述することにより評価している。エッセイの評価項目は「内容」「構成」「英文の正確さ」「エッセイの独創性」の 4 観点である。



上記の表は英語力に関する本校の推移である。d は、「グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外における入賞者数」、e は「卒業時における生徒の 4 技能の総合的な英語力として C E F R の B 1 ～ B 2 レベルの生徒の割合」、f は「高校卒業時までに英検準 1 級以上を取得している生徒」でこの 4 年間の取組で英語 4 技能の力の伸びが顕著であることがわかる。

本校の英語指導方法については、公開授業を年間 4 回ほど開催して、他校の教職員が多く来校し、授業後は研究協議を通して授業改善を進めている。また、神奈川県教育課程説明会やグローバル教育の

説明会で本校の取組を説明し、県内の高等学校に周知している。

さらに「現代社会」では、時事問題も取り上げながら、地球環境問題や世界の政治制度など日本との比較をしながら、グループでまとめた内容を発表し合うなどお互いの視野を広げる活動を積み重ねている。

特色ある取組①（海外スタディツアー）

本校は「日本の強みを海外へ売り込む方法」という課題研究テーマを設定しているが、さらにサブテーマとして「グローバルビジネス」「国際平和貢献」「世界の環境問題」という 3 つのサブテーマを基に生徒は課題研究のテーマを設定している。その課題研究の一環として実施しているのが 3 方面への海外スタディツアーで、指定 2 年目の平成 27 年度から実施している。

現在訪問している国は、ベトナム、カンボジア、マレーシア（ボルネオ島）で、この訪問に当たり各方面 10 人ずつ選考された生徒たちは、4 月下旬から現地を訪問する 8 月まで様々な事前学習を行って、訪問地域の理解を深めていく。実際に訪問した際には、現地企業の訪問・現地大学生徒のディスカッションなど S G H の課題研究テーマに沿った活動をする。帰国後は、各チームが共同して行う活動として文化祭におけるスタディツアーのコーナーの展示及び説明、全校生徒対象の活動報告会を行い、他の生徒や文化祭の見学者に周知することにより波及効果が見られている。さらには、チームごとに考えた事後活動として、校外への普及活動にも取り組んでいる。今までの取組としては、カンボジアに井戸を作るための募金活動や小学校や中学校での環境学習、地元横浜のフェアトレードショップマップ作成など積極的に取り組んでいる。

特色ある取組②（S G H 生徒交流委員会）

指定 2 年目の平成 27 年度に、生徒の自主的な活動として希望生徒を対象にした生徒委員会が発足した。本校では G S Y という略称で呼んでおり、正式名称は“Global Students from YIS”である。

この生徒委員会の活動は大きく分けて 2 つある。1 つ目は校内での定期的な活動で、毎週 2 回昼休みに集合してグループに分かれて社会問題について議

論し合う。2つ目は神奈川県内の他の指定校との交流会で、年間3～4回実施し、毎回テーマを決めてグループごとに分かれて議論、解決案の提示を行う。グループに分かれる際は、参加校生徒が均等に分かれるようにしている。

このような他校との交流はSGH事業によって始まった活動で、横への広がりという点で大変貴重であり、課題意識を高めることができています。

自主的な委員会活動であるが、平成29年度及び平成30年度は、1年次生の参加者が多い。入学前から学校説明会等で、本校がSGH指定校であることを知り、「学習だけでなくSGHの活動をしてみたい」ということが本校を志願する理由になっており、委員会への参加人数の増加に結びついていると考えられる。

高大連携について

本校は東京外国語大学と高大連携協定を結んでおり、SGH事業でも大学の視点から多くの助言を受けている。東京外国語大学だけではなく同じ神奈川県内にキャンパスのある慶應義塾大学や横浜国立大学とも指導・助言を受けながら活動を進めている。

連携大学の教授には、SGH講演会で、生徒に対して本校で直接語りかける機会を依頼している。また、1・2年次生徒を対象に「総合的な学習の時間」でピア・サポート（生徒一人ひとりが取り組んでいる研究について大学院生が助言したり、大学院生が自身の研究テーマについて話したりする企画）を実施している。生徒10名につき一人の大学院生の派遣を依頼しているため一度に20名ほどの大学院生が必要で、連携大学の協力を得ることによって実現している。

海外進学に向けた取組

卒業後の進路としては、国内の大学に進学する生徒がほとんどであるが、国内の大学にある学部では自身の専攻分野に該当する学部がないということで、

海外進学を目指す生徒もいる。

海外進学を目指す生徒が続いている要因として5点挙げることができる。1点目として、在校生の在学中の留学への支援体制ができています。海外の高校に1年間留学して現地での学習取組状況に応じて、留学という包括的な単位認定制度がある。このことを、説明会を通して、生徒に周知しており、毎年10名前後の生徒がこの制度を利用している。さらに夏季休業中及び春季休業中などを利用した短期の海外留学や海外大学へのキャンプなども紹介しており、香港大学のキャンプにも2年連続で参加している。

2点目として、第2外国語を全生徒が必修で選択していて、海外で文化を学びながら、さらにその言語運用能力を伸ばすことを目指す生徒がいる。

3点目として、海外進学に向けた取組として、大使館や海外進学を支援している企業担当者による海外大学説明会を本校で、実施している。毎年100名を超える生徒・保護者が参加しており、進路選択の一つとして意識している家庭が多いことが分かる。

4点目として、本校卒業生で海外に進学した生徒に來校してもらい、在学生対象の説明会を行っている。在校生は、在学時の科目選択や出願に向けて必要な準備、受験に向けた学習内容など具体的な話を聞く機会となっている。

5点目として、SGHの活動における大学院生や企業関係者、大使館関係者の講演会や座談会を通して海外に視野を向けられるようになっている。特に、ここ数年、海外に進学した卒業生の中に、SGHの活動を通して大学での専攻分野が確定し、その探究のために海外進学を決断する生徒が続いていることから、SGH活動が生徒のキャリア形成にとって非常に効果的な活動であることが分かる。

以上をもって、本校のSGH取組についての報告とする。